

いんまき
印牧 ユミさん

足寄町森林組合 業務課長兼総務課長

1967年生まれ。足寄町出身。地元の高校を卒業後、農協職員になるが、森林組合に転職。事務員として入ったが、経営計画書の作成や補助金の申請作業などにも携わるようになる。今は、「とち森林ラボ」で、足寄での森林資源の地産地消を目指す。家族は夫、娘。



林業のまちで、森林資源の地産地消を実現させたい

きっかけ

足寄町の高校を卒業して、そのまま足寄町の農協職員として働いていたのですが、たまたま森林組合から声が掛かって、事務員として入ることになりました。当時、現場作業をしている男性が、夕方に現場から戻ってきて、夜に経営計画書の作成や補助金の申請作業をするのは大変だという声があり、それらの仕事を手伝うようになりました。申請作業を行う上で、やはり現場を知らないといけないということで、自然と現場にも行くようになったこともあり、現在は、業務課と総務課のそれぞれの課長になりました。

満足度

森林の仕事は非常にやりがいを感じています。現場に行くと、山を見て歩いて、山ができていくさまを見ると、本当に奥が深い仕事だと思います。また、現場の変化を肌で感じられるようになりました。今、木食い虫やネズミの被害が増えているのですが、ベテランの人の話で昔はなかったらしく、焼き地ごしらえ（木を伐採した後、苗木を植えるために焼いてきれいにする）がなくなったことが原因ではないかと思っています。今は機械化が進んでいるので、手間のかかる焼き地ごしらえをすることが少なくなったのですが、山にとって本当にいいことを何かを考えながら仕事をしています。

苦労

女性が山の現場に行くことはめったにないことだったので、山仕事をする男性たちの中に入って大変だったでしょうと周りからは言われましたが、たまたまそういうことを気にしない性格だったこともあり、あまり苦労がなかったですね。また、聞くことが恥ずかしいと思うこともなかったため、なんでも聞いて、それを周りの人が受け入れてくれました。当時、子供も小さかったのですが、仕事をしながら子育てをすることについても、周りの人の理解があり気兼ねなく休めたので苦労がほとんどなかったです。そういう意味では本当に周りの人に恵まれていると思いますね。

これから

今、「とち森林ラボ」というグループを作って活動しています。足寄町は林業の町ですが、製材所がないなど、地元の木材を使う仕組みがありません。そこで森林組合、行政、造材・ペレットボイラー・製材会社、大工、アーティストなどが繋がって、地元のカラマツを使ったボイラー熱供給や発電所などの森林の地産地消に取り組んでいます。森林文化があるヨーロッパでは、本当に上手に森林資源を活用しています。十勝はまだ開拓が始まって150年しか経っていないので、木の文化をこれから作っていければと思います。それには山への愛情が大事で、山に興味がある人を是非連れて行ってあげたいと思っています。

子育てしながら仕事をするには、職場のみんなの理解が大事。社会も変わってきているので、だんだんとやりやすくなるのではないのでしょうか。少なくとも自分が苦労したことを今の人にしないことも肝心だと思います。